

会 報

第 1 号

東北大学教育学部同窓会

同窓会会報第1号の刊行に寄せて



東北大学教育学部長 野 口 和 人

昨年度,教育学部・教育学研究科として初めて,現 役の学部生・大学院生と卒業生・修了生の方々とが一 堂に会し,様々交流する機会を設けることができまし た。ご参加いただいた皆様からの評判も頗る高く,こ れからも定期的に開催していきたいと考えていると ころです。

この交流会の開催を企画するにあたり、同窓生の皆様から果たしてご賛同・ご協力いただけるのか心配していたのですが、心配をした私どもが恥ずかしくなるほど、全くの杞憂にすぎませんでした。様々な年代の同窓生の皆さんにお声がけをしたところ、すぐに多くの皆様から「教育学部のためになるなら…」、「後輩の皆さんのお役に立てるなら…」と、ご快諾のお返事をいただきました。当初は連絡が届かなかった方からも、「そのような会があると聞いたが、まだ参加可能であれば自分も加えてほしい」との連絡をいただいたりもしました。私どもとしては大変嬉しく思い、また「東北大学教育学部(教育学研究科)」という強い繋がりを改めて感じ取ることができました。今後も様々な取り組みを通じて、この繋がりをより「見える」形にしていきたいと思います。

さて、新型コロナウィルス感染症の感染拡大は、大学における教育や研究に様々な影響を及ぼしました。 それらにはネガティブな側面ももちろんありましたが、一方で、大学や国を超えた教育の枠組みを構築していくことや国際的な研究の促進というポジティブ な状況ももたらしました。教育学研究科はこれらにいち早く、また積極的に取り組んできましたが、こと教育に関して、教育のグローバル化、国際共修といったことが謳われているなか、大学や国を超えた教育の枠組みといったものは、ますます拡大、充実していくであろうと思われます。つまり、国際的な高等教育共同体といった枠組みの構築がますます促進されていく(これまでも進んできたことではありますが)ことと思われます。

教育学部・教育学研究科がその枠組みに参画し、確 固たる位置を継続していくためには、教育学部・教育 学研究科としての「ウリ」を形作っていかなくてはな らないだろうと思っています。教育においても、研究 においても、他の大学とは異なる特色を打ち出してい くことについて、同窓生の皆様からも様々ご意見をい ただければ大変有り難く思います。

ちなみに、これは私の全くの個人的な印象ですが、 私が学生・院生であった頃、中心部から離れた東北の 地で、世の主流とは少し違った視点や角度から物事を 捉え、アプローチしていくという雰囲気が東北大学教 育学部・教育学研究科にはあったように思います(「違 う!」とおっしゃる方がいらしたら、大変申し訳あり ません)。そのような雰囲気が上で述べた「ウリ」や「特 色」に繋がっていけばと思うのですが、国際卓越研究 大学という看板のもとでは、そのほかにもいろいろと 考えていく必要がありそうです…。

「学部同窓会活動」に期待

懐かしや わが心の 故郷・仙台



星 永揚 (1966年(S41年)卒)

中川 典雄 (1966年(S41年)卒)

令和5年3月26日東北支部総会開催、東北支部を 学部同窓会へ統合することが決定しました。私たち東 北支部会員は学部同窓会に統合したことで東北大学 教育学部同窓生であることに変わりありません。同窓 会活動の一つとして受け止め、学部同窓会が更に活発 に活動することを期待します。

学部同窓会の新しい活動と実感した事は令和4年10 月1日に教育学部が企画した「東北大学教育学部交流 会」でした。東北大学 115 周年、総合大学 100 周年記 念事業の一環として同窓生34名、在校生24名、教職 員 13 名が参加しました。進行の中で参加した同窓生 等が 11 のグループに別れ意見交換を行いました。こ れまでの同窓会は同年代の交流が主でしたが、今回は 異年次の同窓生と若い在校生との交流でした。それだ けに新たな緊張感を生じ自分の意見をまとめ、的確に 発言する機会を持つことになりました。同時に相手の 意見をきちんと聞く大切さを久しぶりに感じました。 同じ高校卒業の在校生がタイへ留学したことを報告 し、同期生同士夫妻の共働きの話を聞き学部の教育活 動の変換、前進や若い世代の生活力を感じた次第です。 同窓会は構成要員が老若男女を問わず生活や意見も 異なり、人生模様そのもので、耳を傾ける事で新発想 が生じると思います。「交流会」は有意義な同窓会活動 と感じました。

拠り所は卒業した東北大学であり教育学部です。大学の環境も大きく変化し、それに伴い教育学部の活動も左右されると思います。教育学部が文理融合型の学習、研究環境を整え追求をできるように、同窓生として支援を続けます。そのためにも教育学部の現状や今後の研究動向を同窓会会報で取り上げるよう希望します。同窓生は母校である東北大学教育学部の更なる発展を願うばかりです。学部同窓会が同窓生と教育学部をつなぐ取り組みを、今後も展開されることを期待します。

「榴岡の櫻花 泉ヶ岳の白雪に・・」、「峰秀で水澄 みたり 青葉の山広瀬の流れ・・」、これ等は私が学ん だ中学校と高校の校歌の一節である。目を閉じると傘 寿を迎えた今でも当時の風景が蘇り、懐かしさと追憶 の思いで胸が熱くなる。仙台を離れてはや三十七年に もなり、里帰りは墓参りを含めて年二・三回程度。な のに懐かしさがますます強くなるこの頃である。(あ ながち歳をとったせいばかりではない)。

こうした状況の私にとって、一昨年十月一日に開催された「教育学部交流会」は、同窓生・現役学生・教職員が一堂に会する初めての試みだったが、とても充実したひと時を過ごすことが出来た。心から感謝している。同窓生にとっては、久方ぶりの再会に話が弾み、しかも現役学生諸君から若きエネルギーを貰えることができた。また、現役学生諸君にとっては、これからの進路や人生の生き方等を相談できる先輩と出会う貴重な機会となったのではないかと思っている。また、開催場所の教育学部は、高校・大学を通じて五年間も通った川内にあるだけに懐かしさもひとしおだった。

こうした事から、私は「教育学部交流会」を今後も 継続実施されることを強く希望している。

次に教育学部への現状認識と今後の期待。私が在学 したのは今から半世紀も前の昭和三十年後半。当時、 教員養成課程を分離し、宮城教育大学を創設する動き をめぐり学内が大きく揺れていた。連日のように反対 集会やデモに明け暮れた時代であった。

分離後から今日に至る教育学部の推移。コースが教育学コースと教育心理学コースに大別され、担当教師陣も素晴らしい顔ぶれ。学生諸君も一学年五十名程度と精鋭ぞろい。学部紹介要覧で拝見すると業績も素晴らしいものであり、心から敬意を表している。これからも一層の発展と充実を、遠くさいたまの地より心から祈っている。

教育学部の益々の 発展をお祈りして



石渡 潤 (1984年(S59年)卒)

碧空と杜と海の すき間にいたころ



佐々木 宏之 (1994年(H6年)卒)

大学を卒業して 40 年の歳月が経ちました。民間企業へ就職し、アカデミアとは別の世界を歩んで来ました。

そのような中、一昨年、教育学部主催の交流会に参加させていただく機会がありました。

久しぶりに母校へお邪魔し、学部の現状や将来に向けた話をお聞きしたり、在校生の皆様とコミュニケーションさせていただくことができました。

その中で感銘を受けたことは、現在の教育学部の構成は、40年前と比べると大きく変わり、時代の流れを見極めながら、進化している内容でした。同時に、アグレッシブに進んで行こうという姿勢が感じられ、教育研究機関として素晴らしいことだと思いました。

東北大学が「国際卓越研究大学」認定候補になった との報道がありましたが、まさに、その取り組みの成 果だと感じる一方で、このような体制を具現化するた めには、たいへんな努力・労力を要したことと思いま す。

この素晴らしい環境の中で、学生の皆様も、研究者・教官の皆様も、力いっぱい学び、考え、悩み、挑戦して行かれることでしょう。その中から、新しい時代を牽引する「人財」を世の中へどんどん輩出されて行くことを願ってやみません。

私たち卒業生も、何らかの形で貢献できたらと思います。

学部長をはじめとして関係者の皆様、学生の皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。



「しーんぱーい、ないからねー♪」と KAN がスピーカー越しに諭していた。心配はしていなかったが展望もなかった。授業よりバイト。友たちとたむろしてはアパートで卓を囲んだり(全員の煙で部屋は真っ白だった)、稲荷小路あたりで安酒をあおったりしていた。ただ根拠なく「それなりの何者か、にはなれるだろう」とだけは漠然と思っていた。30年あまり前。文字通り他愛のない日々だった。

学部に上がると、教養部から横断歩道をまたいでキャンパスが移る。少しずつだけれど、ぼくらの間に流れる空気が変わっている気がした。いつの間にか企業情報を集めている友。ゼミの先輩を手伝い始めた友。滅多に見かけず何をしているか分からない友。専攻の授業は人数が絞られ、いよいよゴマカシがきかなくなった。社会への入り口……というにはみんな未熟だったけれど、あの短い横断歩道は、他愛のない混沌を抜け出す小さな分岐点だった。

結局、誘われるまま院に進み、学会発表をひとつだけこなすと、やっぱり考え直して民間就職に舵を切った。松島までヤマハセローを飛ばして、波を一日中眺めながら院中退を決めた(重大な決断は海を見ながら、という妙な習慣はこのときからだ)。

「どんな学生時代でした?」。2022 年秋。学部交流会に招かれ、現役学生から問われた。あのころの自分より、皆さんはるかに優秀だという印象はアリガチの域を超えて疑いがなく、恥ずかしながら、どう考えても自慢できる材料がない。そして思う。

A:「キラキラと素晴らしい日々だった」けれど 「誇れるものは何もない」。

B:「誇れるものは何もない」けれど「キラキラと 素晴らしい日々だった」。

AでもありBでもあり。同じようで違う。気分によって変わるような。でも、あの日々は「B」だったよ、と振り返っていたい。50歳を過ぎていまだ「何者か」には成りかけの今の、ささやかな願いだ。

教育学部卒なのに先生じゃ

ないの? (ええ、まあ)



小川 直人 (1998年(H10年)卒)

出会いを大切に



千葉 楓子(教育学部4年)

教員養成ではない教育学部における職業選択の主流がどのようなものなのか未だに知る由もないが、実は「教育学部を出たのに学校の先生じゃないの?」という定番の質問をされたことはほとんどない。なぜならそもそも教育学部とは思われないから。学芸員、それも、美術どころか映像を専門にしているとなると日本に数えるほどしかいないので、まず大抵は美大を出たと勘違いされる。更に言うならば、生まれも育ちも仙台だが何故か東京の大学を卒業したと思われる。うるわしい誤解はそのままにしておいたほうが良いだろうか。

このように卒業生としては異端と思われる私だけれども、はじめての交流会なるものに参加してみれば、在学生はもちろん、さまざまな世代、さまざまな職業に就いている人がいるものだとあらためて感心した。同窓会の企画だからといって、現在の仕事に大学で学んだことを無理に引きつける必要もなく、とにかくそれぞれの大学時代の経験を聞き興味深い時間を過ごすことができた。やはりあの時代というのは、その後の人生に大きな影響を及ぼす時間のようである。

ところで、一緒にお話しした人から私はどのように 見えていたのだろう。卒論・修論では文化政策のこと を取り上げて「君は教育学部なのにこんなことを研究 しているの?」と聞かれたりもしていたが、今や学芸 員なのだから、案外と教育に近い仕事に就いた人間と 見なされたかもしれない。学芸員の資格はたまたま興 味半分でとった講義がその必要単位だっただけなの だけなのだが。学んだことが何にいつ役に立つかなど わからないものなのだ。

大学を出て四半世紀近く経った。いくつになっても、 どこにおいても、学ばないで済む人間はいないとます ます思う。その礎を学んだのはこの学部であることは 間違いない。一口に「教育」と言っても幅広い領域が あるが、いずれも「人が学ぶこと」に関心を持つ経験 は、それぞれの人の日常、未来に活かされるはずであ る。同窓会はそうした私たちの接点、集う広場のよう なものにすることになったらと願う。 令和 4 年 10 月に行われた「教育学部同窓会」に学生として出席しました。教育学部は 70 人ほどしかいない小さな学部なので、横のつながりが他学部と比べて必然的に狭くなってしまいます。同窓会では学生・教員・0B0G という縦のつながりを感じながら、和やかに対話して先生方や 0B・0G の方々の思いを知ることができました。

コロナ禍の入学であった私たちにとって、人間関係の少なさは重大な問題でした。そんな中私は、大学生活のモットーとして「やってきた機会には乗ってみる」ことを密かに掲げていました。このモットーのおかげで、学部の先輩の県外へのフィールドワークに 2、3 年生のうちから同行して刺激を受けられましたし、所属した落語研究部では部長を務め、仙台で活躍する落語家の方々と知り合って外部の落語会にも出演させていただきました。また、アルバイト先の伝で、仙台伝統のすずめ踊りを披露する団体、通称「祭連(まづら)」にも加入させてもらえました。こうして振り返ると、制限がある中でも、出会いを大切にすることで様々な活動に参加でき、とても楽しい大学生活を送ることができたと感じます。このような日々の中で、将来のビジョンが見えてきました。

私は卒業後の進路として人材系の民間企業を選びました。松本研究室で社会教育を学び、公民館職員の方々と関わることを通して、人の人間らしい気持ちに向きあい、「やりたい」「がんばりたい」という情熱を応援するような仕事がしたいと思うようになったためです。また、自分の情熱も大切にしたいです。社会人として働きながらも、落語や祭り、地域活動という自分の好きなことを続けながら生きていきたいと思っています。この意志と将来のビジョンを形作ってくれた教育学部での日々に感謝いたします。

令和 4 年度 東北大学教育学部同窓会事業報告

- 現役学生に対する諸援助事業
 - ・博士論文執筆援助事業 ・海外学会発表渡航費援助事業 ・卒業研究学会発表援助事業 ・学部学生学会参加援助事業
- 現役学生を対象とするキャリア・セミナー事業
- 令和 4 年度卒業・修了学生の祝賀会援助事業
- 東北大学教育学部交流会-東北大学総合大学 100 周年記念事業-の共催
- 同窓会 web ページの広報活動に関する(同窓会会報)事業

令和 4 年度 東北大学教育学部同窓会会計決算報告

【収入の部】

事	項	予算額	決算額	増減	備	考
前年度繰越		7, 239, 977	7, 239, 977	0		
学部生入会金・会費		430, 000	230, 000	▲ 200,000	23名×10,000円	
修士入会金及び会費		116, 000	84, 000	▲ 32,000	入会 12 名×6,000 円	
					継続 3名×4,000円	
博士入会金及び会費		30,000	36, 000	6,000	入会 3名×8,000円	
					継続 2名×6,000円	
預金利息		6	3	▲ 3		
同窓会総会懇親会参	加費	0	0	0		
同窓会東北支部より	入金	0	706, 898	706, 898		
合	計	7, 815, 983	8, 296, 878	480, 895		

【支出の部】

	· -				
事	項	予算額	決算額	増減	備考
通信費		2,000	4, 536	▲ 2,536	往復はがき
会議費	理事会	14,000	0	14, 000	
旅費	理事会出席旅費	60,000	101, 900	▲ 41, 900	
印刷費	同窓会入会案内印刷	26, 400	30, 800	▲ 4, 400	
事業費					
海外学	全会発表渡航費援助事業	210, 000	0	210, 000	
卒業研	f究学会発表援助事業	150, 000	79, 280	70, 720	
学部生学会参加費援助事業		150, 000	0	150, 000	
博士論文執筆援助事業		200, 000	0	200, 000	
会員相互交流促進支援事業		30,000	0	30,000	
教育学	产部本部同窓会総会	0	0	0	
令和 4	年度卒業・修了祝賀会	70,000	22, 400	47, 600	
教育学	学部交流会	0	370, 000	▲ 370,000	
事務費					
会費徵	收払出料	12,000	9, 006	2, 994	ゆうちょ銀行へ
その他事務費		40,000	3, 080	36, 920	振込手数料
	合 計	964, 400	621, 002	343, 398	

令和5年度へ繰越額	収入決算額	支出決算額	残額	備	考
	8, 296, 878	621, 002	7, 675, 876		

参考

単年度ベース収支合計	収入決算額	支出決算額	残額	備	考
(前年度繰越分を除く)	1, 056, 901	621, 002	435, 899		

会計監査報告

関係書類を監査の結果、適正に処理されていることを認めます。 令和5年8月1日 ■中川 <u>申</u>芹

_{監事} 小野瀬 *美桂*



令和5年度 東北大学教育学部同窓会事業計画

- 現役学生に対する諸援助事業
 - ・博士論文執筆援助事業 ・海外学会発表渡航費援助事業 ・卒業研究学会発表援助事業 ・学部学生学会参加援助事業
- 現役学生を対象とするキャリア・セミナー事業
- 令和5年度卒業・修了学生の祝賀会援助事業
- 同窓会会報発行事業(新規)
- 同窓会名簿の整理に関する事業
- その他、会員の親睦を図る事業(会員相互交流促進事業)

令和5年度 東北大学教育学部同窓会会計予算

【収入の部】

事項	前年度予算額	予算額	増減	備考
前年度繰越	7, 239, 977	7, 675, 876	435, 899	
学部生入会金・会費	430,000	370, 000	▲ 60,000	37 名×10,000 円
				(R2~R4 実績の平均)
修士入会金・会費	116, 000	110, 000	▲ 6,000	入会 17 名×6,000 円 継続 2 名×4,000 円
				(R2~R4 実績の平均)
博士入会金・会費	30,000	28, 000	▲ 2,000	入会 2 名×8,000 円 継続 2 名×6,000 円
				(R2~R4 実績の平均)
預金利息等	6	3	▲ 3	預金利息等は前度実績より
合 計	7, 815, 983	8, 183, 879	367, 896	

【支出の部】

事項	前年度予算額	予算額	増減	備考
通信費	2,000	16, 500	14, 500	R4 年度決算額参考(会報送付費用見込み含
				む)
会議費	14,000	14,000	0	理事会等食事代(R4 年度予算額と同額)
旅費	60,000	60,000	0	理事会・支部総会出席(R4 年度予算額と同
				額)
印刷費	26, 400	55, 800	29, 400	入会申込案内(R4 年度決算額より)、会報
				印刷
事業費				
海外学会発表渡航費援助事業	210, 000	210,000	0	3名×上限7万円
卒業研究学会発表援助事業	150, 000	150, 000	0	5名×上限3万円
学部生学会参加費援助事業	150, 000	150, 000	0	5名×上限3万円
博士論文執筆援助事業	200, 000	200, 000	0	4名×上限5万円
会員相互交流促進支援事業	30,000	30,000	0	3団体×上限1万円
令和 5 年度卒業・修了祝賀会	70,000	70,000	0	会場費等として(R4 年度予算額と同額)
事務費				
会費徴収手数料	12,000	12,000	0	郵便振替手数料・ゆうちょ銀行へ
その他事務費	40,000	40,000	0	アルバイト謝礼、振込手数料含む
小 計	964, 400	1,008,300	43, 900	
翌年度繰越見込額	6, 851, 583	7, 175, 579	323, 996	
合 計	7, 815, 983	8, 183, 879	367, 896	

参考

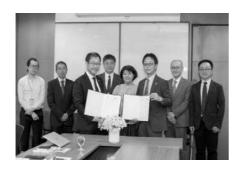
事	項	収入予算額	支出予算額	残額	備	考	
単年度ベース収	支合計見込	508, 003	1, 008, 300	▲ 500, 297			
(前年度繰越分	を除く)						

教育学部・教育学研究科 令和5年の出来事

ユネスコバンコク事務所とチュラロンコン大学を訪問しました

3月17日、教育学研究科とユネスコバンコク事務所の学術交流協定更新のため、野口研究科長、 小嶋副研究科長および劉准教授がユネスコバンコク事務所を訪問しました。調印式後、両機関に関 する取り組みを相互に紹介し、今後の研究・教育に関するさまざまな交流・協力の可能性について 意見交換を行いました。

また、当日午後、チュラロンコン大学教育学部・研究科を訪問し、それぞれの大学における研究 ・教育などに関する取り組みについて意見交換を行いました。今後の交流の展開が期待されます。





駐日中国新潟総領事館代理総領事が教育学研究科を訪問しました

6月27日、駐日中国新潟総領事館劉宏(リュウ コウ)代理総領事が本研究科へ表敬訪問されました。冒頭、野口研究科長は、歓迎の挨拶のあと、これまで本研究科は中国の大学と教育・研究交流面で積極的かつ有意義な交流を行っている旨述べました。次いで、グローバル共生教育論コースの劉靖准教授から、本研究科における国際学術交流の取組みおよび中国清華大学との共同研究の進展に関する説明がありました。

劉代理総領事からは、学部科目の海外教育演習は、中国への現地調査を通した日中若者の交流と相互理解の促進において大変有意義な取組みである旨述べられました。また、清華大学との共同研究の進展に対して、高い関心を示されました。





教育学研究科×加齢医学研究所ジョイントシンポジウムを開催しました

7月12日(水)に文科系総合研究棟大会議室にて、教育学研究科×加齢医学研究所ジョイントシンポジウム(主催:教育学研究科)を開催いたしました。当日は現地とオンラインを合わせ 40 名ほどの方々にご参加いただきました。このシンポジウムは「未来の教育に人間脳科学を活かすには」をテーマに開催し、6 名の登壇者の先生方が様々な角度から教育×脳を見据えた講演をいたしました。総合討論では哲学と脳科学の融合の可能性、学部生はどのように脳科学を学んでいけばよいかといった多様な話題で議論が盛り上がりました。分野は違えど「人間を理解し社会に役立つ知見・技術を提供する」という共通のゴールを目指して歩んでいることを確認し、今後の教育学研究科と加齢医学研究所の協働が加速していくことが大いに期待されるシンポジウムとなりました。

教育学部・教育学研究科の学生が中国清華大学・北京師範大学・北京外国語大学・中国 21世紀教育研究院・ユネスコ北京事務所などを訪問しました

9月17日~28日、中国北京で実施された2023年度「海外教育演習」の現地調査に、教育学部生9名と教育学研究科大学院生2名が参加しました。この科目は2013年度に教育学部で開設され、事前学習とフィールドワークを通して、アジア地域における教育と社会についての理解を深めることを目的としています。

北京に滞在中、学生たちは中国清華大学、北京師範大学教育部、北京外国語大学国際教育学院を訪問し、中国の大学生との交流を行い、訪問先の大学の教員による講義に参加しました。それぞれの関心に基づいた課題を設定し、「大学入試」、「塾と教育」および「教師と教育」に焦点を置き、現地の学生たちに対するヒアリング調査も行いました。9月25日には、学生たちは中国21世紀教育研究院を訪問し、中国の農村教育について、専門家と意見交換を行いました。翌26日には、ユネスコ北京事務所を訪問しました。訪問中、同事務所の教育専門家であるMr. Robert Paruaより、ユネスコのグローバル教育プログラムに関して説明を受けました。その後、学生たちは日本の教育における現状と課題について、グループ発表を行いました。Mr. Paruaから学生たちへ、発表に対する有意義なコメントを頂いたのち、日本の教育問題に対する解決策について、学生たちと引率教員との意見交換も行いました。訪問の最後に、Mr. Paruaと引率教員の劉靖准教授は同事務所と東北大学の今後の協力・連携の可能性について意見交換を行いました。





国立台湾師範大学で小嶋教授が教育学研究科の取り組みについて講演しました

10月19~20日に国立台湾師範大学(台北)教育学院において Asia-Pacific Association for Teacher Education (APATE) Conference が開催されました。この国際会議は、主に東アジア・東南アジアの教育系大学の学部長・研究科長が招待され、それぞれの教育・研究の取り組みを共有することを目的したものです。同学院の Prof. Shelly Tien (Dean of College of Education)のご招待を受け、本研究科の代表として小嶋副研究科長が、Deans' Forum セッションにて、本研究科における教育・研究の取り組みについて、とくに multiculturalism、sustainability、teacher's reprofessionalization に焦点を当てて講演し、他大学との交流促進に向けた基盤構築ができました。

2022 教育学部交流会報告

10月1日(土)、文科系総合研究棟11階大会議室などを会場として、「東北大学教育学部交流会」を開催しました。

この交流会は、東北大学総合大学 100 周年記念事業の一環として初めて開催し、同窓生 34 名、 在校生 24 名および教職員 13 名の参加がありました。

はじめに、野口研究科長・同窓会長から教育学部の現状について報告があった後、星関東地区同窓会長より在学中の思い出話を含むご挨拶を頂きました。

次いで、神谷教務委員会委員長から「コロナ禍におけるハイフレックス授業と教育学部の新カリキュラムー自由懇談に先駆けてー」と題した講演が行われました。

その後、授業で使われている各教室を会場として 11 のグループに分かれた自由懇談では、研究 や就職等についての活発な意見が飛び交い、議論が繰り広げられました。

参加した同窓生からは、「交流会の時間が短く感じられるほど参加者の思いが伝わってきた」、「世代を超えた交流やコロナ禍の授業の実体験等、有意義な時間となった」等という声が聞かれ、 今後の教育学部がまさに世代を超えて一枚岩になることが期待されるひと時となりました。





2024 教育学部交流会予告

第2回の教育学部交流会を東北大学 117 周年ホームカミングデーと同日に開催することといたしました。ホームカミングデーは例年、9月下旬から 10月の土曜日に川内萩ホールで開催されますが、今年の開催日は今のところ未定です。開催日が決まり次第、教育学部ホームページ等でご案内しますので、今しばらくお待ちいただければと存じます。

令和5年度 役員名簿

会 長 野口 和人 (S59年卒)

副会長 鹿野 毅 (S43 年卒)

星 永楊 (S41 年卒)

理 事 家根 敏明 (S32 年卒)

光井 正 (S39 年卒)

阿部 琢也 (S40 年卒)

岡崎 忠 (S40 年卒)

関口 隆 (S41 年卒)

渡邉 宣隆 (S43 年卒)

軍司 啓 (S43 年卒)

笹川智恵子(S44年卒)

阿部 孝 (S44 年卒)

原 喜信 (S42 年卒)

吉川 邦彦 (S56 年卒)

口川 / 6/8 (500 十十)

加藤 邦治 (S62 年卒) 熊井 正之 (H 6 年卒)

神谷 哲司 (H7年卒)

吉植 庄栄 (H 7 年卒)

後藤 武俊 (H10年卒)

松本 大 (H13 年卒)

監 事 中川 典雄 (S41 年卒) 小野瀬美佳 (H10 年卒)

編集後記

教育学部同窓会の事務を担当している後藤です。この度、同窓会会報第1号を皆様にお届けできることを嬉しく思います。今回は令和4年10月1日に開催した教育学部交流会へのご感想を中心に同窓生の皆様からご寄稿を頂きました。おかげさまで好評を博することができましたので、今後もこうした企画を継続的に実施していく予定です。また、令和5年度中の教育学部の活動についても報告しております。近年、本学部はアジアを中心とした国際交流活動を活発に展開しております。最新の動向については随時、教育学部ホームページで発信しておりますので、折に触れご覧頂ければ幸いです。

さて、今回こうして会報を発行することになりましたのは、教育学部同窓会東北支部の方々からのご指導によるものです。東北支部は令和5年3月に活動を終了し、教育学部同窓会に統合されました。これを機に、東北支部が行ってきた会報の作成を事務局で引き継ぐことになりました。同窓生や在校生の活躍の様子を発信する媒体として、さらに活用していきたいと考えています。また、東北支部からは統合にあたり、教育学部基金に多額のご寄付を頂きました。記して感謝申し上げます。ご寄付をもとに、より一層手厚い学生支援を行って参りますので、これからも引き続きご支援のほど、よろしくお願い致します。

同窓会事務局

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 東北大学教育学部同窓会 事務局 e-mail sed-alumni@grp. tohoku. ac. jp

雪江美久理事(S35年卒)は令和5年9月にご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。